

帝京大学医学部5年生に対する「薬物乱用防止」に関する意識調査

○土屋 雅勇<sup>1</sup>, 渡部 多真紀<sup>1</sup>, 渡辺 茂和<sup>1</sup>, 齋藤 百枝美<sup>1</sup>, 細野 浩之<sup>1,2</sup>,  
渡邊 真知子<sup>1,2</sup>, 石川 敏夫<sup>3</sup>, 滝川 一<sup>3</sup>(<sup>1</sup>帝京大薬, <sup>2</sup>帝京大病院薬, <sup>3</sup>帝京大内科)

【目的】近年、若者を中心とした薬物乱用が急速に拡大しており、その防止対策に医療従事者の積極的な関与が重要である。我々は防止対策の一環として薬学部・看護学部学生の「薬物乱用防止」に関する意識調査を報告してきた。今回は、医学部学生を対象として「薬物乱用防止」に対する意識調査を行った。

【方法】アンケート対象は帝京大学医学部5年生106名、期間は2012年11月～2013年10月である。アンケート内容は「薬物乱用防止」10項目について無記名自記式とし、「大麻」と「脱法ハーブ」のイメージについては、SD法による7段階評価を行った。

【結果および考察】知っている乱用薬物名として挙げられた数の平均は4.3、「大麻」が最も多かった。情報源としては「テレビ」、「小中高の授業」の順で多く、小中高での薬物乱用防止の授業担当者は、「担任の教師」、「保健の教師」、「警察官」の順であった。「どのような理由であれ、絶対に使うべきではないし、許されることではない」と回答した規範意識の高い学生は「大麻」で75.5%、「脱法ハーブ」で78.3%であった。脱法ハーブの入手については「少々苦勞するが、なんとか手に入る」、「簡単に手に入る」を合わせて46.2%で、比較的入手が安易と考えていることが認められた。薬物乱用問題への関心は「非常に関心がある」、「ある程度関心がある」を合わせて50.0%であった。「大麻」と「脱法ハーブ」は「悪い」、「迷惑である」とのイメージを持つ学生が多かった。今回の結果から、薬物乱用問題の関心の高さは50.0%にとどまっており、さらに規範意識の低下している学生も認められたため、今後、大学教育において啓発を進めるとともに医療従事者として薬物乱用問題への規範意識を高めることが重要であると考えられる。